

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2019

課題番号：26370526

研究課題名（和文）電子テキスト化による刊本蘭日辞書の研究とその訳語の研究

研究課題名（英文）Producing the Electronic Texts of the Dutch-Japanese Dictionaries Published in the Late Edo Period: A Contribution to Studies of the Japanese Words Translated from Dutch

研究代表者

櫻井 豪人（SAKURAI, Takehito）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60334009

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代後期に刊行された江戸ハルマ系統の蘭日辞書、すなわち『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』の本文を電子テキスト化し、以前作成した長崎ハルマ系統の『和蘭字彙』の電子テキストと併せて、収録されている訳語（日本語）の検索が容易に行えるようにした。また、以下の事柄についても分析を行った。(1)漢字の用法についての分析。(2)版木の異同についての分析。(3)見出し語配列の方法についての分析。(4)日本語史の観点から重要と思われる記述の分析。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代の蘭日辞書の中にある訳語（日本語）を探そうとする場合、これまでは概ね以下の作業が必要であった。まず(1)和英辞典で目的とする語の英語を探し、次に(2)何らかの英蘭辞典を用いて対応するオランダ語を見つけ、さらに(3)そのオランダ語から当時の蘭日辞書を引くという作業が必要であった。しかし、その作業には膨大な手間と時間がかかるのみならず、使用する和英辞典や英蘭辞典により検索結果が異なり、実際には蘭日辞書の中に存在するのに見つけれない語が生じてしまう可能性もあった。

本研究で作成した電子テキストにより、蘭日辞書にある日本語を直接検索できるようになり、上記の問題が解消されるに至った。

研究成果の概要（英文）：This study produced the electronic texts of the Dutch-Japanese dictionaries published in the latter half of the Edo era, Haruma Wage, Yakken, Zoho Kaisei Yakken, and Oranda Jii, and made it easier to search for Japanese words in those dictionaries. In addition, this study analyzed the following matters of them: (1) The usage of Chinese characters. (2) The variations of the printing woodblocks. (3) The way of arrangement of the entry words. (4) The significant descriptions from the viewpoint of the history of Japanese language.

研究分野：国語史・洋学資料研究

キーワード：洋学資料 蘭学資料 辞書 翻訳語 『波留麻和解』 『訳鍵』 『増補改正訳鍵』 『和蘭字彙』

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究を開始する前まで、刊本として日本初の英和辞書である『英和对訳袖珍辞書』初版(文久二 1862 年刊、以下『袖珍』)の成立に関する研究を行ってきた。その主な成果としては以下の3点が挙げられる。

- (1)2007年3月に発見された『袖珍』の草稿を分析し、『袖珍』の訳語が、底本である Picard 英蘭辞典(初版 1843 年刊・第2版 1857 年刊)のみならず、Holtrop・Hooiberg・Bomhoff・Weiland といった同時代の英蘭辞典や蘭蘭辞典も媒介にして、蘭日辞書の『和蘭字彙』(安政二～五 1855-58 年刊、『ドーフ・ハルマ』あるいは長崎ハルマと呼ばれる写本の蘭日辞書の刊本)から導き出されていることを明らかにした(櫻井 2011)。
- (2)『和蘭字彙』の日本語部分を全て電子テキスト化することにより、『和蘭字彙』に見られない『袖珍』の訳語の一部を示し、『袖珍』が、蘭学の世界で用いられるようになった比較的新しい訳語を辞書類によらずに取り入れていることを明らかにした(櫻井 2013a)。
- (3)上記『和蘭字彙』電子テキストを用いることにより、『袖珍』が Medhurst 英華字典(1847-48 年刊)から抜き出したとみられる訳語の全体を初めて明確に示した(櫻井 2013b・2014)。

しかし、櫻井 2013a でも指摘した通り、『袖珍』が『波留麻和解』(寛政八 1796 年刊)や『訳鍵』(文化七 1810 年刊)、『増補改正訳鍵』(安政四 1857 年刊)といったいわゆる江戸ハルマ系統の蘭日辞書を用いて編纂されたか否かについては先行研究でも議論があり、明らかになっていなかった。例えば、森岡・田島 1965 は『増補改正訳鍵』の影響が見られるとしているが、永嶋 1970 はそれを疑問視している(pp.68-70)。その議論に決着がつかない理由は、結局のところ、江戸ハルマ系統の蘭日辞書について索引等が全く整備されておらず、収録されている訳語の把握が十分になされていなかったことにある。

よって、『和蘭字彙』と同様、『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』についても電子テキスト化すれば、それら江戸ハルマ系統の辞書から『袖珍』に取り入れられた訳語がどの程度存在するのかといった分析が容易に可能となり、のみならず、その電子テキストを一般の人にも使いやすい形に整備して公表すれば、今後の語誌研究や翻訳語研究の発展に大きく寄与することにもなると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、対象とする上記の蘭日辞書、すなわち『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』『和蘭字彙』の電子テキストを完成させ、オランダ語を介することなく直接日本語(訳語)を検索できるようにすることにある。

蘭日辞書の中にある日本語を探そうとする場合、これまでは非常に手間がかかった。その一般的な手順としては、まず(1)和英辞典等で目的とする語の英語を探し、次に(2)何らかの英蘭辞典を用いて対応するオランダ語を見つけ、さらに(3)そのオランダ語から当時の蘭日辞書を引くという作業が必要であった。その場合、以下のような問題点があった。

異なる辞書を何度か引かなければならないので、時間と手間がかかる。

日本語から英語を探し、さらに英語からオランダ語を探すという過程を経るので、辞書で引かなければならないオランダ語がかなり多くなる場合がある。

使用する和英辞典や英蘭辞典により検索結果が異なり、実際には蘭日辞書の中に存在するのに見つけられない語が生じてしまう可能性がある。(予想外の見出し語の中に目的とする訳語の存在する場合がある。)

オランダ語においても、語の意味や用法、綴り方等は時代によって変化するため、使用する英蘭辞典は蘭学時代のものを使用する方が望ましいのであるが、研究する側に当時の英蘭辞典を複数用いて適切に検索できるような環境の無い場合がほとんどであるので、使いこなすのが難しい。

蘭学時代のオランダ語はまだ正書法が定められておらず、辞書の見出し語でも綴りにゆれがあった。それを知らなければ、実際には辞書内に存在する語であっても存在しないものと判断してしまう危険性がある。

特に『訳鍵』や『増補改正訳鍵』では、複数の辞書を用いて見出し語を増補していることもあり、見出し語の配列方法において統一性に欠ける部分がある。また、子見出しの字下げを行っていないことが原因で見出し語が整然としたアルファベット順になっていない部分があるため、語の検索が困難な場合がある。

蘭日辞書の中の日本語を検索する際に生じる上記の問題は、本研究で作成する電子テキストを用いればほとんど解消されることになる。

## 3. 研究の方法

本研究を遂行するための時間と労力の大半は、ただひたすら電子テキストを作成する作業に費やされ、当初予定していた5年の研究期間はほぼ入力作業を行うことに終始した。しかし、真に研究方法について考えなければならなくなったのは、一通り入力作業を終えた後に、どの

ような方針で翻字の統一を図るかということに迫られた時であった。対象とする蘭日辞書における日本語の漢字はいずれも楷書体で記されているが、近世日本における楷書体漢字には、字体規範の上でも、異体字意識の上でも、さらには用字法の上でも現代と異なる部分が数多く存在する。それゆえ、書かれている漢字をただ見た目通りに翻字するだけでは、検索をかけた際、探している言葉がヒットせずに検索漏れを起こしてしまう恐れがある。また、これらの電子テキストがなるべく長期間にわたって利用可能な状態のまま保存されるよう、Microsoft Word で検索する方法を取ったのであるが、その場合において、利用者側に特別な知識が無くとも問題なく使用できる状態にするためにはどのような配慮をして翻字するかということが常に懸念材料となった。そういったことをはじめとして様々な問題に直面したため、電子テキスト化における細かい入力規則を作り上げて行くことがすなわち本研究における研究方法の中核となった。その入力規則とは、たとえば(1)漢字の異体字についての判断と翻字に用いる漢字の規則、(2)特に筆記体で記されている『増補改正訳鍵』のオランダ語について、ij で翻字するか y で翻字するかという規則、(3)誤記・誤刻の類に対してどのように、どの程度まで注記を施すかという規則などである。それらの規則を決定するためには、疑念のある箇所について様々な資料を参照しつつ検討し、「なぜそのようになっているのか」について逐一考えなければならなかったのであるが、その作業を繰り返すうちに以下のような研究成果が得られた。

#### 4. 研究成果

本研究における成果は5つの内容に大別される。その概要を以下に記す。

##### (1) 刊本蘭日辞書の電子テキストの完成

『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』『和蘭字彙』の電子テキストを完成させ、全ての資料について日本語から直接検索できるようにした。また、『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』についてはオランダ語も入力したので、オランダ語も含めた全文検索が可能となった。

##### (2) 刊本蘭日辞書に見られる漢字字体および用字法についての分析

上記の蘭日辞書に見られる漢字の字体や用字法について分析を行った。『和蘭字彙』についてはその研究成果を論文にまとめ、近世日本における楷書体研究の一例として発表した。(櫻井2016・2018。)最終的に定めた入力規則は、主に以下のようなものである。

Microsoft Wordの「あいまい検索」において相互にヒットする範囲内で、なるべく原本の漢字字体に近いJIS第1水準・第2水準の漢字を用い、JIS第1水準・第2水準内に異体字が無い字は第3水準以下の字を用いる。異体字を含めて日本語フォントの中に存在しない字については中国語フォントを用い、蛍光ペンでマークする。

「譌字(訛字)」と「同形異字」という概念を導入し、漢字学における厳密な異体字判断基準によるのではなく、近世期の異体字意識を酌み取りつつ現代の楷書規範に沿った漢字で翻字する。その上で、資料に表記されている漢字字体と電子テキストに翻字した漢字字体との間に何らかの差異が生じている場合は、蛍光ペンでマークすることにより、利用者に対して注意を促す。

誤字や通用字、現代一般の表記とは異なる表記がなされている語などについては、《 》内に現代一般の表記を併記する「別表記挿入」を行い、検索の漏れを防ぐようにする。

これらの入力規則を定めるまでに生じた問題点をもとに、『和蘭字彙』を対象として、近世の楷書体漢字の用字法に関する分析を行った。具体的には、用例の数や分布を調査・分析した上で、電子テキスト化する上で問題となる字の組み合わせを、「本来異体字ではないものがほぼ異体字として用いられている例(例えば砲・炮・鉦)」「書き分けがなされておらず異体字の関係であるかのように見える例(例えば斑・班)」「通用が多く異体字のようにも見えるが一部に書き分けが存在する例(例えば惣・摠・總・総)」に大別し、用字法についての分析結果を示した。

##### (3) 現存諸本の本文異同および版木の異同の発見

上記の蘭日辞書を電子テキスト化する際、複数の現存伝本の画像を参照して入力したことにより、本文異同や版木の異同をはじめとする書誌的異同について新たに知り得たことがあった。

『波留麻和解』については、ともに「江戸版」と呼ばれている東京大学総合図書館蔵本(東大本)と早稲田大学図書館洋学文庫蔵本(早大本)との間にも蘭語木活字部分において異同の存在することが報告されていたが(杉本1978p.588)、その異同について全冊調査したところ、蘭語活字部分が別版となっているのはAの部の冒頭二十丁までに限られ、それ以降は全くの同版であることが確認された。また、その異同のある範囲内では収録する蘭語もいくらか異なり、早大本は東大本に比べて、底本であるハルマ蘭仏辞典第2版(1729年刊、以下「ハルマ2版」)に記されているカラ見出し(「zie.」で始まる参照見出し)を多く入れる傾向が見られた。(なお、本研究において『波留麻和解』は、現存伝本の中で最も古い形を有していると思われる東大本によった。入力開始当初は影印本によって作業を行ったが、印刷が不鮮明な箇所が多かったので、新たに原本を撮影して確認作業を行った。)

『訳鍵』については、伝本によって上巻(乾)の丁付けがアルファベットの部ごとに付けられている本と、全丁通しで付けられている本のあることが明らかとなった。下巻(坤)はいずれの伝本も全丁通しで丁付けが付けられているので、アルファベットの部ごとに付けられている本が初印に近い本であり、全丁通しで付けられている本が後印本であったものと推測される。また、本文の一部の版木が別版で印刷されていたり、版木に修正が加えられていたりといった異同も新たに確認された。『訳鍵』は整版による版本であるが、国立国会図書館蔵本(国会本)と早稲田大学図書館洋学文庫C546(早大本)とを見比べてみると、41丁・44丁・45丁・131丁はそれぞれ別の版木を用いて印刷されていることが新たに判明した。さらに、研究代表者家蔵本(櫻井本)と比べてみると、50丁・51丁については国会本と早大本とで同じ版木を用いて印刷しているが、櫻井本ではそれらと異なる版木を用いて印刷していることも確認された。先行研究においてもそういった異同が存在することについて漠然と言及されてはいたが、現存伝本全体にわたる詳細な報告はなされていないので、今後広く書誌調査を行う必要性が感じられた。

#### (4) 刊本蘭日辞書における見出し語配列方法の分析

上記の蘭日辞書のオランダ語配列について、現代のアルファベット引き辞書とは異なる配列方法が取られている部分のあることを具体的に明らかにした。それが最も顕著なのは「i/j」「u/v」「ij/y」の扱いである。江戸ハルマと呼ばれる『波留麻和解』と、長崎ハルマと呼ばれる『ドーフ・ハルマ』(天保四 1833 年成、写本)は、ともにハルマ 2 版を底本としているが、『波留麻和解』はハルマ 2 版と同様、i と j、u と v を区別せずに配列し、ij と y については語によって ij または y に綴るのに対し、『ドーフ・ハルマ』はハルマ 2 版の配列方法を取らず、i と j、u と v をそれぞれ区別して見出し語を配列し、ij は一様に y の位置に配列するという違いがある。また、ハルマ 2 版の見出し語配列はそもそも現代のように厳格なアルファベット順配列を取っておらず、「三字見出し」「親見出し」「子見出し」という三層構造を取ることで、「子見出し」レベルにおいて多少アルファベット順に乱れがあったとしても、目的とする見出し語が探し出せるような配列方法となっている。この配列方法は、正書法の定まっていなかった当時のオランダ語を配列する際に編み出された、現代のアルファベット引き辞書とは異なる検索システムとすることができる。『波留麻和解』はハルマ 2 版の見出し語配列順をほぼそのまま残しており、「子見出し」を字下げすることにより「親見出し」と「子見出し」の区別を残しているため、ハルマ 2 版の検索システムをそのまま引き継いでいると言える。しかし、『波留麻和解』を小規模化した『訳鍵』は「子見出し」の字下げを行わなかったため、「親見出し」と「子見出し」の区別が無くなり、現代の辞書の配列方法に慣れている我々の目から見ると見出し語がアルファベット順になっていないと感じる箇所が飛躍的に増大することとなった。また、『増補改正訳鍵』は、江戸ハルマ系統の『訳鍵』に対して長崎ハルマ系統の『和蘭字彙』を用いて増補・改正を施しているのであるが、『訳鍵』と『和蘭字彙』とで見出し語配列方法が異なることに気づいて『和蘭字彙』の配列方法に変更しようとした様子が諸所に見られるものの、その作業を徹底しなかったため、統一的な見出し語配列方法になっていない。それゆえ、見出し語配列の乱れている箇所がさらに増大してしまっている。(この研究成果については 2020 年度中に論文として発表する予定である。)

#### (5) 翻訳語研究において注目すべき用例の発見

上記の蘭日辞書の中に、従来の翻訳語研究においてまだ指摘されていなかった注目すべき用例が新たに見出された。例えば「凝固」という和製漢語と思しき化学用語は、これまで宇田川玄真著『医範提綱』(1805 年刊)の用例が古いものとして知られていたが、東大本『波留麻和解』には「凝固」が 22 箇所存在し、「凝固シタ」のように漢語サ変動詞としての用例が見られる一方で、「凝固メル」(こりかためる)といった訓読みしていると見られる用例も見られた。これはすなわち、蘭学の中で「こりかためる」から「ギョウコ」へと変化して行く過程を示しているものと見られる。同様に、『波留麻和解』の中の「思考」も、これまで知られていた最も古い用例よりかなり遡ることになるが、3 例見られる「思考」のうち、1 例は「思考フ」と訓読みしている用例であった。「壓搾(圧搾)」に至っては全 6 例が「壓搾ル」という形になっており、まだ漢語化していない状態を示している用例として興味深い。その他にも、「壙石」「固定」「球根」「触覚」などの語について、これまでの指摘よりも古い用例が『波留麻和解』の中に見出された。

以上が本研究の成果の概要であるが、最後に、冒頭で述べた『袖珍』の『増補改正訳鍵』利用をめぐる森岡・田島 1965 と永嶋 1970 の論の対立について言及しておく。森岡・田島 1965 で挙げられている、『増補改正訳鍵』から『袖珍』に取られたとされる 10 例の中には、永嶋 1970 が指摘するように、そのように断定するには疑わしい例もいくつか見られるので、永嶋氏の指摘にもうなずける部分がある。そのためであろうか、田島 1967 および森岡 1969 では、それらの疑わしい例が省かれて 5 例に絞られ、森岡 1991 ではさらに 4 例に絞られている。その 4 例とは、『袖珍』remove の「取除ル」と『改正増補訳鍵』wegneemen の「取除クル」(正しくは「取り除クル」)、『袖珍』deacon の「司施ノ吏」と『改正増補訳鍵』diaken の「司施ノ人」、『袖珍』gold-smith の「鑄金匠」と『改正増補訳鍵』goudsmid の「鑄金匠」、『袖珍』holy-rood-day の「祭日ノ名彼国九月十四日ヲ云フ」と『改正増補訳鍵』kruisverhessing (Picard 英蘭辞典第 2 版は

kruisverheffing でこちらが正しい)の「祭日ノ名」である。櫻井 2011 で示した通り、『袖珍』は Picard 英蘭辞典以外の英蘭辞典も用いており、Picard に示されているオランダ語のみで『改正増補訳鍵』の中に訳語があるかないかを論じることができないのであるが、本研究で作成した電子テキストを用いれば容易にその検討が可能となる。最初の「取除ル」については『和蘭字彙』の opneemen に「取除ル」があるので、むしろ『和蘭字彙』から取られている可能性の方が高い。二番目の「司施ノ吏」については Medhurst 英華字典の deacon に「司施之吏」とあるので、そちらから取られた可能性の方が高い。三番目の「鑄金匠」については『和蘭字彙』に無く、Medhurst の goldsmith の項も「金匠」となっているので、確かに『増補改正訳鍵』から取られた可能性が考えられる。最後の「祭日ノ名」は『和蘭字彙』にも Medhurst にも無いので、『増補改正訳鍵』から取られた可能性が高いようにも思われるが、「祭日」は『和蘭字彙』の vierdag にもあり、『袖珍』の「彼国九月十四日ヲ云フ」という注釈は『増補改正訳鍵』にも見られないので、微妙なところである。

従って、少なくとも森岡・田島 1965 に示されている例だけでは、『袖珍』編纂時に『増補改正訳鍵』が用いられた証拠として不十分であると言える。

しかし、そのことは、『袖珍』の編纂において江戸ハルマ系統の辞書が用いられた可能性を消し去るものではない。というのも、櫻井 2013a において、『袖珍』が『和蘭字彙』からではなく独自に取り入れた訳語として取り上げた「凝固」「鎔解」「固定」「球根」「思考」「単純」「触覚」が、本研究で作成した電子テキストにより『波留麻和解』の中にも見出され、そのうちの「凝固」「鎔解」「固定」「思考」「単純」「触覚」は『訳鍵』の中に引き継がれるとともに、「凝固」「鎔解」「固定」「思考」「単純」は『増補改正訳鍵』にも含まれていることが判明したためである。つまり、上記の「凝固」「鎔解」「固定」「思考」「単純」は、森岡・田島 1965 における「鑄金匠」の例と同様、『袖珍』が江戸ハルマ系統の蘭日辞書を用いて編纂された可能性を残す例であると言える。

勿論、これらの訳語が存在するからといって、『袖珍』編纂時における江戸ハルマ系統の蘭日辞書の利用が証明されたことにはならない。「鑄金匠」もそうであるが、そういった訳語は江戸ハルマ系統の蘭日辞書以外の蘭学資料にも見出せるためである。従って、それらが江戸ハルマ系統の蘭日辞書から取られていることを証明するためには、さらに別の証拠が必要となる。

しかし、『訳鍵』や『増補改正訳鍵』から直接取られたか否かは別として、それらの訳語の源が『波留麻和解』まで遡ることができ、『和蘭字彙』の中には見られないにもかかわらず『袖珍』の中に見られることについては注目すべきことと考えられる。このような例は決して多くないものと思われるが、本研究で作成した電子テキストによって初めて明確に、長崎ハルマ系統の『和蘭字彙』の中には存在しないが江戸ハルマ系統の『波留麻和解』『訳鍵』『増補改正訳鍵』の中には存在する訳語が、『袖珍』の中にも含まれていることを示すことができたことになる。

なお、『増補改正訳鍵』に含まれる訳語は、そのほとんどが『訳鍵』か『和蘭字彙』のいずれかから取られている。逆に言えば、『訳鍵』や『和蘭字彙』に見られない『増補改正訳鍵』独自の訳語は、(皆無ではないものの)ほとんど見当たらないということである。従って、『袖珍』の編纂時に江戸ハルマ系統の蘭日辞書が用いられたと仮定して、それが『訳鍵』であったのか、あるいは『増補改正訳鍵』であったのかについて判断するのは極めて困難であり、その点について明言することはほぼ不可能であるものと推測される。

#### 引用文献

- 森岡健二・田島尚子 1965 「蘭和辞典の英和辞典に及ぼせる影響」『蘭学資料研究会研究報告』174
- 田島尚子 1967 「文明開化期における訳語の研究—英和对訳袖珍辞書を中心として—」『日本文学(東京女子大学)』28
- 森岡健二 1969 『近代語の成立 明治期語彙編』明治書院
- 永嶋大典 1970 『蘭和・英和辞書発達史』(1996年ゆまに書房新版による)
- 杉本つとむ 1978 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』(早稲田大学出版部)
- 森岡健二 1991 『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院
- 櫻井豪人 2011 「英和对訳袖珍辞書」初版草稿の諸相と蘭書の利用」『日本語の研究』7-3
- 櫻井豪人 2013a 「『和蘭字彙』電子テキスト化による『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語の研究」『日本語の研究』9-3
- 櫻井豪人 2013b 「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語—その 1: Medhurst 英華字典の訳語をそのまま用いている訳語—」『近代語研究』17
- 櫻井豪人 2014 「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語—その 2: Medhurst 英華字典の訳語に改変を加えている訳語—」『国語語彙史の研究』33
- 櫻井豪人 2016 「近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について—『和蘭字彙』を例に—」『国語と国文学』93-5
- 櫻井豪人 2018 「近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について—『和蘭字彙』を例に—(続編)」『茨城大学人文社会科学部紀要 人文コミュニケーション学論集』2

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 21
2. 論文標題 『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について(4)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『近代語研究』（武蔵野書院）	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 20
2. 論文標題 『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について(3)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『近代語研究』（武蔵野書院）	6. 最初と最後の頁 99-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 2
2. 論文標題 近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について 『和蘭字彙』を例に（続編）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『茨城大学人文社会科学部紀要 人文コミュニケーション学論集』	6. 最初と最後の頁 77-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 19
2. 論文標題 『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について(2)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『近代語研究』（武蔵野書院）	6. 最初と最後の頁 103-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 93-5
2. 論文標題 近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について 『和蘭字彙』を例に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『国語と国文学』	6. 最初と最後の頁 113-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井豪人	4. 巻 18
2. 論文標題 『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について(1)	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『近代語研究』(武蔵野書院)	6. 最初と最後の頁 89-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 櫻井豪人
2. 発表標題 洋学辞書・単語集の概略とその電子テキスト化について
3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班合同研究発表会(近世・近代グループ、文体・資料性グループ)(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 櫻井豪人	4. 発行年 2017年
2. 出版社 港の人	5. 総ページ数 910
3. 書名 開成所単語集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----